

平和を明日へ

広島原爆73年

Ⓣ

広島市の平和記念公園近くのビル2階で、2017年7月に開店したブックカフェ「ハチドリ舎」。毎月20〜30回、核兵器や災害など社会のさまざまな課題について考えるイベントを開いている。

店主の安彦恵里香さん(39)は茨城県出身。24歳の時、自身に合う海外留学先を探るため、核廃絶を訴えるため被爆者らに乗せて世界各地を巡る非政府組織(NGO)「ピースボート」の船に乗り込んだのが転機になった。

世界中で絶えない紛争や殺人。ニュースで知るたび

理不尽さに憤りつつも「仕方がない」と思っていたが、ピースボートで出会った人々は違った。「あきらめるのは、課題の解決を妨げているのとはほぼ同じだ」と気付かされた。

ピースボートのスタッフとなり、07年に広島に赴任。09年に退職後、平和市長会議(現・平和首長会議)が核兵器廃絶への具体的手順などを提示した「ヒロシマ・ナガサキ議定書」について、賛同を自治体に呼び掛けるキャンペーンの事務局長を務めたほか、核兵器をテーマにしたアートブックを仲間と制作するなどして

語り合う場



ハチドリ舎で開かれた平和教育を考えるイベント
＝4日夜、広島市

「核不要」共有したい

「広島には平和記念資料館や被爆建物など原爆について伝える場所は多いが、

それらを見て何を感じたかを語り合う場がない」との問題意識が、カフェを始め、た理由の一つだ。安彦さん

方を探った。「原爆投下について教えるのはいいが、過去の出来事のように扱って願っている。」

(桑原大輔)

は「資料館を見て被爆証言を聞いた後、時間をかけて感じたことを(心の中に)落とし込んでほしい」と話

沖縄出身で桜美林大4年の又吉麻菜美さん(24)は「沖縄でも地上戦について平和教育が行われているが、小学校から同じような内容が続くため、慣れてしまつ人もいる。もっと対話を取り入れて、自分が平和にどう貢献できるか思案する教育に変わってほしい」と考えを深めていた。

毎月6のつく日は被爆者と話せる機会をつくり、7月26日まで計367人が参加した。「被爆者と友達になってほしい。友人がどうして原爆に苦しめられなければいけなかったのかと考えてもらいたい」と思

8月4日夜は広島、長崎の出身者や観光客ら約35人が集まり、平和教育の在り

「ハチドリ舎は、社会の主人公である私たち一人一人が学ぶ場所」と語る安彦さん。「核兵器は要らない。人間が殺し合う必要はない。そんな当たり前のことをみんなと共有したい」と願っている。